

<青春の記念館>

はじめに

松下電器産業(株)創業者の松下幸之助氏はサミュエル・ウルマンの“青春”の詩を自分の「モットー」と決め、翻訳して関係幹部20,000人に配布した(ニューヨークタイムズ1991年10月)。彼はまた、70歳にしてパナソニック社を立ち上げた時に、力を与えてくれたのはこの詩だという。

サミュエル・ウルマンの孫の一人であるジョナス・ローゼンフィールド氏は、アメリカ・フィルム・マーケティング協会(AFMA)会長として日本出張中に、フジサンケイ・コミュニケーショングループ副会長の石田達郎氏との夕食会の席上、祖父ウルマンの名前を出した。「あなたはサミュエル・ウルマンの孫なのですか？」石田氏は何度も繰り返した。彼は折りたたんだ“青春”の詩の写しをポケットから引き出して言った。「私はいつもこれを肌身離さず持ち歩いているのです。」(ザ・ハリウッド・レポーター1998年12月)

ソニー生命(株)の川島社長室の壁には私には一目でそれと分かる、あの懐かしいメヤー(ウルマンの筆頭孫)の直筆メッセージとサイン付き“青春”の一枚が額に入って掛けられていました。「“青春”はエンタープリナー(企業家)精神なのですよ。」と川島氏は言われる。それはかつて川島氏が、事業の難関を突破するにあたって盛田氏から学んだことだったのです。(「盛田昭夫氏とお弟子さんの“青春”」当書2008年4月より)

サミュエル・ウルマンが書いた“青春”の詩は、近年日本で最も多く引用された文章の一つだと言われます。座右の銘として、あるいは心のよりどころとして、これほどまでに多くの人々から愛されるのも、この詩が持つ不思議なばかりに人の心を動かす何かがあるからでしょう。読む人に、常に若く、強く、明るく生きる力を与える「人生の応援歌」と呼ばれるパワーがあるのです。(1994年3月：アラバマ：UAB ニュース)

1840年ドイツ生れ。11歳までフランス育ち。その後アメリカに移住し多方面に活躍。ウルマンは多国籍人生をおくった詩人でした。彼の詩“青春”がGHQマッカーサー元帥紹介により戦後の日本で有名になり、多くの日本人に勇気を与えたのです。自分たちの青春を戦争で無為に失ったと感じていた人々に「そうではない、自分たちの人生最高の時は自分たちの内にある。まだまだ頑張れるぞ！」と教えてくれたのです。その意味でこの詩は、敗戦日本復興の見えざるバックボーンであったとまで言われます。(日本の愛を勝ち得た詩、公共放送用一時間レポート等)

松永安左エ門、松下幸之助と松下一家、伊藤忠兵衛・恭一親子、当詩の名訳で有

名な岡田義夫各氏等々、この詩を愛し、普及に尽力した著名人はあまりにも多く、とても列挙しつくせるものではありません。政財界の大人物、特に財界の一流人に愛好者が多いのも特筆に価することです。そしてそれらの人々の熱意こもる推奨により、この詩は日本中に広まっていったのです。今では戦後荒廃した日本経済を救った詩とも呼ばれ、調査では企業経営者達の「愛好する言葉」トップ5に入る。

日本企業米国現地法人の一人の男が、たまたまこの詩人の孫、メヤー・ニューフイールド氏と親しくなり、1992年のある日、日米協会の下で「詩人の家を取壊しから救い記念館にする」プロジェクトを上げた。当初現地では抵抗もあったが、ボランティア活動として駆け回ってみると、多くの日米人が人種、宗教、社会的地位等に関係なく一つにまとまって協力、プロジェクトの目的が実現しました。

1993年7月6日、東京で行われた同プロジェクト日本側募金贈呈式は、東京サミットにからみ、クリントン米国大統領が厳しいミッションで来日したタイミングと偶然に一致した。それはマスコミなどによって「日米経済戦争」の真ただ中における「国際親善のシンボル」と呼ばれたのです。(1994年3月：バーミングハム・ポスト・ヘラルド)

今では地元の人々は勿論、これまでに来訪した世界27カ国の人々、そして多くの日本人にとっても心の財産となる詩人の記念館が、米国アラバマ州の地に存在する。日米双方の善意の活動が、家を買取り復元して「サミュエル・ウルマン記念館」を創り出したのです。

こんなことが実現し得るということを誰が予測できたでしょうか？見ず知らずの一ビジネスマンの、はるかアメリカからの電話依頼に応じて、宇野収東洋紡織会長兼関経連会長が募金まとめ役として奔走され、「募金委員」に松下正治松下電器産業会長、盛田昭夫ソニー会長、宮沢次郎トッパンムーア会長、作山宗久「青春という名の詩」共著者（「募金贈呈目録」原文の順）らの方々が名を連ねられたのは、今にして思えば「ほとんど奇跡」。これが“青春の詩”の力なのです。心をつなぐものごとは、世界中どこでも実現するという実証。サミュエル・ウルマン記念館は、その記念塔でもあります。

米国アラバマ州に行けば、ウルマンが寝起きし、詩を書いた部屋がある。暖炉の前で孫たちを膝にだんらんしたイスがある。孫が夜遅く帰ってきて家に入れず、屋根伝いに窓から祖父の部屋に入り、彼の枕元を通過してこっそり自室に戻ったという二階の窓がある。“青春”を書いた詩人の生きた軌跡があるのです。

(粟倉健二著「青春の記念館」2008年4月より)

禁無断転写 Awakura: All rights reserved